

- 1 教育事業名 「とかしきボランティアスクール」
～だれかのために だれかとともに～
- 2 ねらい これからボランティア活動をはじめの方を対象にボランティア活動への理解を深め、ボランティア活動に向けた期待と意欲を高めるとともに、必要な基礎的知識・技能を習得させる。
- 3 期 日 平成27年5月8日（金）～10日（日）2泊3日
- 4 場 所 国立沖縄青少年交流の家
- 5 募集定員 30名程度
- 6 参加人数 32名
- 7 参加者内訳 高校生22名・大学生10名
（男性24名、女性8名）（県内32名）
- 8 講師 音野太志氏（特定非営利活動法人沖縄ウォーターパトロールシステム）
実習「安全管理」
遠矢英憲氏（名桜大学准教授）
講義「青少年教育」
竹内弓人氏（青少年の家ボランティア）
講義「ボランティア活動の意義」
法人ボランティア
演習「青少年教育施設におけるボランティア活動」
赤嶺智郎 主任企画専門職
講義「青少年教育施設の現状と運営」

9 実施プログラム

5月8日										15:30	16:00	16:30	17:15	17:30	18:00	19:00	19:30	21:00		
											受付	集合	乗船	移動	開会	夕食	仲間づくり	①講義	入浴	就寝準備
5月9日	7:00	8:00	9:00	9:30	10:30	12:00	13:00								16:00	18:00	19:00	21:00		
	起床	ついで	朝食	清掃	移動	②テント設営	③講義	昼食	④海洋研修				⑤野外炊事			夕食	⑥演習	入浴	就寝準備	
5月10日	7:00	8:00	9:00			11:00	12:00		15:00	15:20	16:00	17:10								
	起床	朝食	⑦テント撤収	⑧講義		昼食	⑨演習		閉会	移動	乗船	解散								

10 事業の様子

【1日目】



《レクリエーションで仲間づくり》



《講義「ボランティア活動の意義」》

【2日目】



《海洋研修プログラムの体験》



《指導法の勉強》



《講義「青少年教育」》



《野外炊事》



《演習「青少年教育施設におけるボランティア活動」先輩ボラによるプログラム企画運営》



【3日目】



《講義「青少年教育施設の現状と運営」》



《事業の企画体験》



《演習「安全管理」救急救命法の訓練》

《レスキューシミュレーション》

11 エピソード（参加者の声、アンケートより）

【参加者の声】

- ・ ゆっくりボランティアについて考えたら、昔からやってきたボランティア、なぜ自分はやりたいのだろうと思った。もっと挑戦しようと思った。
- ・ 自ら発信することが大切だと思った。
- ・ 全体を通して、一歩踏み出す勇気を大切にしたい。
- ・ ボラがどういうものなのかが、自分の知っていたものをはるかに越えていたので、これからはこの事業をいかして、色々なものに参加してみたいです。
- ・ コミュニケーションの大切さ、人とのつながりなどを学んだ。
- ・ 今回の事業で、ボランティアは自由で、自分の価値観が大切だと思いました。これからもボランティアに参加していきたいと思いました。
- ・ 人と目線を合わせることの大切さ、価値観を共有する重要性を学び、ボランティアとは何かを考えた。

12 担当者所見

本事業は、当青少年の家でのボランティア活動に必要な基礎的な知識や技能を習得させ、法人ボランティアへの登録と今後の事業参画にむけての意欲の向上を計ることを目的として実施した。

2泊3日の日程でボランティア同士の仲間作りを中心に、各プログラムにおいては体験をとおり、職員と連携して子供達へ指導を行う際に必要な基礎知識・技能を身につけた。

講義「ボランティア活動の意義」は様々な分野で豊富な経験のある先輩ボランティアの体験談を交えた内容で、参加者それぞれのボランティアに対する考えや活動を行う意義を考える機会となった。また、演習「青少年教育施設におけるボランティア活動」では、高校生や大学生を中心とした先輩ボランティアによるプログラム企画運営のもと、レクリエーション体験では参加者の積極的な姿が見られ、「ボランティア」をテーマとした話し合いでは様々な視点から活発な意見交換が行われた。ボランティア自身が経験から学んだことを実践する場があることに、参加者も刺激を受けた様子であった。

研修最後の演習「安全管理」では、和気藹々とした雰囲気から一変、救急救命法の訓練やレスキューシミュレーションにおいて、命に係る現場の話聞く参加者の表情やその後の訓練への取組が真剣に変化していったことが印象的であった。

これらのことから、当青少年の家でのボランティア活動へのイメージ作り、ボランティア活動への理解を深め、ボランティアとしての活動に向けた期待と意欲を高めることができたと考える。

今後は、青少年の家ボランティアとしての実践に繋がるよう、ボランティア同士、ボランティアと職員との連携を深めていきたい。